

## 「何故？」を大切に教育

(2011.1.05)



秋葉原の連続殺人犯と、幼女殺害の宮崎は、同じ系列にあると言う人がいる。宮崎は、日本がアメリカと戦争した事実も、原爆投下も知らなかったという。しかし、アニメやビデオの知識はふんだんに持っていた。自分の生活実感の中だけの「小さな物語」と、自閉した状態にあったが、歴史的な「大きな物語」はなく、歴史意識を喪失していた。

新聞の「声」欄に、クロアチアに旅行した大学生の話が載っていた。宿泊先で、オランダ人、ボスニア人等々、7人で戦争について話し合った。彼等は同年代の人でも、紛争について深い知識と考えをしっかりと持っていた。日本の学生は、日本が世界で唯一の被爆国である事実しか伝えられず、「何故戦争が起こったのか」「それについて君はどう思うか」という質問に答えることができず、恥ずかしい思いをした。彼等は「Why」を頻繁に使っていた。日本の学生は、日常の事実だけしか学ばず、自分がどう思うか、どう感じたか、ということ回避していたと反省し、物事に対して「Why」と考える習慣をつけるようにしていると述べていた。

昨年は龍馬ブームだったそうだ。又、歴史ブームでもあるそうだ。しかし、学生の間では、歴史はあまり人気のある科目でない。世界史は特に人気がない。暗記項目が多いことが、嫌われる理由の一つである。日本では歴史は暗記科目と言われている。指導要領では、「歴史を学ぶことにより、歴史的思考力を培い、国際社会で主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ことを目的とするとしている。しかし、日本の歴史教科は、大学入試内容が大きく影響し、暗記ばかりになっていて、この目的から大きくズレている。ジョン・デューイも、歴史から学ぶためには、「How」どのようにして、「Why」何故そうなったのか、どうして失敗したのか、歴史的分析・解釈のうえに、私達は過去から学び、現在を考え、未来に繋げていく、歴史的思考力を持つことが大切である。

子ども達は、いつも「何故?」「どうして?」を連発する。何でも不思議なのだ。何でも知りたいのである。そんな時、決してすぐに答えを出さない。ヒントは出しても、どうしてかな?何故かな?と一緒に考えるようにしている。その為には、子ども達が本来持っている、旺盛な知識欲、探究心、思考力をもっと培っていく環境を大切にしたい。



## 子どもを大切にす国

(2011.2.01)



新しい年になって、「今年こそ変化の年」になって欲しいと思っている人が多いのではないのでしょうか？一昨年、圧倒的な支持を受けて政権交代した原動力は、この閉塞感を打ち破って、現状を変えて欲しいとの思いからだったはず。多少の抵抗や障壁があっても、新しい未来に向かって前進して欲しいと願ったにも関わらず、反対にズルズルと後退して、逆戻りしているように感じられます。

子育ては、その子の良いところを見つけて誉めて、自尊心やプライドを、そして意欲を持たすことが大切です。勿論、弱い者いじめはしない、ズルはしない等、社会や家庭のルール、生活習慣はしっかりと守るように、繰り返し躡けることは忘れてはなりません。また、本人の生命や他人に危害が及ぶようなことは、厳しく叱責することは必要です。同様に、地域社会や国も同じように良いところを見つけ、そこに注力していくことが大切であると思います。

中国にGDPで抜かれようと、日本はもっと誇れる国であると思うのです。外国旅行から返って来て、空から見る日本は、水と自然に恵まれ緑ゆたかです。祖先が残してくれた財産です。そして、なによりの財産は、人、です。外国人が日本に来て、驚かされるのは、日本人の素晴らしさです。街中で落し物をして、戻ってくる驚きを、「他の国では決してありえないこと」、と言っています。外国では、地震で街が崩壊したり、クーデターで軍とデモ隊が衝突したりすると、人々が暴徒化して、略奪・放火が繰り返される姿が伝わってきます。大晦日から元旦にかけて、鳥取県を吹雪が襲った際に、大雪で千台の車が雪に閉じ込められました。正月にも関わらず、沿道の住民が総出で助けに出た、との報道がありました。中には家にあったお米を、全て炊いて、吹雪の中でおにぎりを配り歩いた人もいたそうです。阪神大震災の時も、みんなが心配し、心を砕き、力を合せ応援しました。モラルと教育程度の高さです。なんといい違いでしょう。

幕末に日本にやって来た外国人が、驚き、「江戸の街には、子ども達が溢れ、嬉々として何とも楽しそう、子どもが大切にされている」、と記しています。しかも、子ども達は、読み書きソロバンまで習っていて、他の諸国に比べ、識字率が圧倒的に高かったのです。

日本が今日まで発展して来られたのは、子ども達を大切に、教育に投資してきたからです。子どもがどんどん減って、子どもへの教育投資が少なくなり、子どもを大切にしなくなるとは、将来はなくなります。今、将来のためにこの国がなすべきことは明らかです。子どもは未来です。未来をよりよい社会にするには、社会、私達大人が、あらゆる要求を抑えて、子ども達のために予算を使うことです。



## 子どもはころぶたびに成長する

(2011.3.01)



Aちゃんが、息を切らせてやって来た。「雲梯、全部できるよ。見せてあげる」と言った。頼んでもないのに、偉そうに「見せてあげるよ」と、ツンと鼻を上げ、胸を張って言った。雲梯のところまで、私の手を引いて行った。手にハンカチを巻いているのに気づいた。血がにじんでいる。雲梯に挑戦し、手の皮がむけても、血がにじんだ手で、何度もチャレンジし続ける子が、毎年何人かいる。全部クリアした時の誇らしげな気分。自分がとても偉くなったような自尊感情。「見せてあげる」と、偉そうな態度をとる子どもの心を思うと、泣きたくなるほど感動してしまうのである。

子どもは殆ど全てのこと、初めてのことであり、最初から出来ることなど何一つない。やっと立つことができるようになって、何度も尻もちをつく。一歩歩けるようになって、何度もころび、何度も立ち上がる。そして、ころぶたびに成長する。できないのが当たり前。できないこと、失敗することを繰り返しながら、できるようになり、成功体験・達成感を積み重ねる。やればできるんだ、自分はすごいんだ、と自信や自尊感情を心の中に育て、意欲的な人間に育っていく。

実はこういう人間としての根幹となる「心」は、遊びの中でこそ育つのである。遊びは誰からも強制されることも、批評されることもなく、自由で、自主的・主体的な活動である。だから、苦しくとも自分の意思で何度も挑戦し続けるのである。それが、いつの間にか「やったことがないから」「できないから」と尻込みするようになってしまうのは何故だろうか。人は評価されたり、比較されたりすることを嫌う。「〇〇ちゃん是可以するのに、あなたは・・・」と、子どもは自分からチャレンジしなくなる。大人の思いが先行し、「やらされる」と、やる気が失せてしまう。「自分からやる」と、「やらされる」のでは大きな違いがある。見守って、自由にやらせていけば、何度でもチャレンジする。成功するまでの過程の中では、応援はするが、口出しはしない。応援と口出しの違いは、なかなか難しい。求められた時のみ助言、援助するが、必要最低限にすべきである。ともすると、大人は、自分の思いが先行し、熱を帯び、余計なところまで手出し、口出しをしてしまいがちである。自分の方が子どもより物知りだから、と教えたがる。

大人は待つこと、見守ること、子どもを理解することが大切である。子どもは挑戦し続けた事が、できるようになったり、成功した時、必ず「見て、見て」とか、「見せてあげる」と飛んで来る。その時、しっかりと子どもの気持ちに共感することが、子どもの自信・意欲を、更に強固にする。これからの人生の中で、苦境に立った時も「幼稚園の時の雲梯に比べりゃ、どうってことないや」と思えるようになる。



## 自粛と復興支援

(2011.4.05)



今月の園児向けの園便りに、理事長の文を載せるスペースがなかったので、朝日新聞「声欄」に投稿した文(4月3日付け)に代えさせて頂きます。

建物の改築をすることになり、契約も終わり、建設会社は各業者への発注も、段取りも整ったところで、この震災にあってしまいました。できることは早くやろうと、直ちに支援物資と義援金を送り、被災者の受け入れを致しましたが、「こんな惨状になっているのに、工事を行うのは非常識だ。被災地の復興を優先すべきだ。」とのご意見がありました。延期するか、中止するか悩みました。建設業者に打診したところ、建築・電気・給排水等の各会社は、工事工程を作り、人の手配・配置も終わっていました。今更、延期・中止となると、その人達の仕事を奪い、生活が成り立たなくなってしまいます。日本の経済がこれ以上停滞してしまうことは、被災地の復興にとっても、大きなマイナス要因になってしまいます。何でも自粛となると、日本全体の元気を奪ってしまいます。自粛すべきこと、援助すること、活発に行わなければならないことを見分けることが必要です。私達にできることは、協力し合い、分かち合うこと、無駄な電気を使わないこと、買いだめしないこと、被災者と被災地の復興のため、支援することです。そして、これ以上経済を落ち込ませないために、今まで以上に需要を喚起し、経済活動を活性化することです。

被災した方々へは、心からお見舞い申し上げます。

## 心は見えるのです

(2011.5.02)



震災後のTVコマーシャルでは、AC広告機構という名が出て、同じCMが繰り返し流れ、うんざりした。二人の女性が出ると、二人の名前は分らないが、顔だけで自動的に「子宮ケイガン」と連想してしまうようになった。もう一つは「心は見えないけど・・・」というCMであるが、はたして「心は見えない」で良いのだろうかと反問した。この世界の中に、自分一人しか存在しないとすれば、心も感情もないが、人は人と関わる中で、心を表出する。そうであれば、心は見えるように表出した方が良く、心を常に見ようと努力し、見えていると考えた方が自然だ。

話は変わるが、幼児教育は根っ子の教育であり、見えない教育であるという人がいる。確かに、小学校以降の教育の様に成績が上がったり、知識が増えたり、直接的に結果として表れてくることはないが、子どもの心や成長を理解しようと努め、子どもから学ぼうとすると、子どもの成長や心が見えてくる。

幼稚園に入園したばかりの子が、クラスのお部屋に入ろうとせず、一日中、靴箱の横に座り続け、マユを上げて、周囲をにらみ続けていたり、声を張り上げ大泣きしている子は、明らかに心や感情を表出している。「おかあさんがいい。お家に帰りたい。幼稚園なんかヤダ!」と思っている。私達は、その心を十分に理解し、受け入れるように努力したい。しかし、きっと幼稚園の楽しさを分ってくれるようになることも、確信している。最後まで、幼稚園なんか嫌だ、と言っている子なんて、何十年間、一人もいませんでしたから。そのうち、横目でお友達や先生の姿を見たり、怖い顔していた目の前を蝶々が飛んで行ったりして「アッ、蝶々だ!」と追いかけているうちに、体が動き、心が動いていく。そうすると、もうすぐに遊び始める。今はじっと待つ、彼らを理解し、全面的に受け入れ、待つことである。その心の成長が見えるから、胸がキュンと鳴るほど、いとおしいのである。



被災した方々へは、心からお見舞い申し上げます。

## 規制緩和

(2011.6.01)



ヨーロッパの国々を旅したことがある。規範を守る国民だと思っていたが、どこの国でも交通信号を守る人が少ない。信号が赤でも、車が来ていなくて、自分で安全だと判断すれば、サッサと渡ってしまう。地方の田舎道では、サークル（円になっている交差点）はあっても、信号機がないことにも気付いた。日本では、殆ど車の通らない田圃道にも信号機があり、幹線道路と交差しているところでは、田圃道には全く車が見えないのに、赤信号であれば誰もがジッと待っている。

「こんなところにも信号機がある！」と思えるところにも信号機がある。住民が要求すると、議員さんも張り切って手柄にしたがるようである。日本人は規制が好きなのだ。自分で判断し、自分で責任を負うより、自主・自立・自由より、お上に規制してもらい、内容より形式だけを守っていた方が楽なのである。

某市で保育所の公募があった。数年前のU市での公募の際には、厳しい条件はなく、今までの実績だけを評価して、何しろ良い保育園を作り、良い内容の保育と運営をしてくれれば良いので、自由に思い切り独自性を発揮して欲しい、というものであった。それとは反対に某市の公募には、長い保育所経験を要する等の、厳しい条件が付けられていた。形式的に条件を整えることはできるが、独自の教育理念・方針を発揮するためには、自園で実績を積んだ人材で運営するのであれば、良い保育はできないので応募しなかった。

公募の提言書の中で、民営化された法人に採用された『元公立』の保育士が、園児を虐待したことが書かれていたが、そこでは、公立の保育士の経験者を採用することが公募の条件となっていた。悪い結果になったのは、民営化が原因ではなく、公的なものを引きずり、民営化の足を引っ張った結果である。又、公立の保育方針・保育内容を引き継ぐことが条件と言っておきながら、民間としての創意工夫による独創的、かつ個性的な運営を目指すようにと、矛盾したことを言っている。

公立を民営化するなら、公的なものを全面的に払拭し、規制を加えず、生き生きとした新しい保育を一から作り上げた方が良い。今の日本も、規制緩和・規制撤廃と言いながら、ちっとも先に進まず、新しい生き生きとしたものが生まれてこない。そんなところに、日本や某市の停滞の原因があるような気がする。



被災した方々へは、心からお見舞い申し上げます。

## 子どもの「時間（とき）」

(2011.7.01)



『忙しい』という言葉が嫌いである。「お忙しいでしょう」とよく言われる。その度「全然いそがしくありません。」と返答するが、そんなに忙しくしているように見えるのかな～と考えてしまう。全然セカセカ生活していないし、子ども達ともよく遊んでいる。子ども達は私に「いつお仕事に行くの？」と言う。私が幼稚園に来るのは、お仕事とは思っていない。いつもブランコに乗ったり、紙ヒコーキを飛ばしたり、鬼ごっこをしているのだもの、お仕事とは思っていないのが当たり前。私だってそうは思っていない。私ほど子ども達と遊んでいる園長はいないでしょう。それなのに、どうして私と会うと、「お忙しいでしょう」と言うのだろう。他所の園長先生は、ワイシャツにネクタイなので、仕事をしているように見えるが、私はトレパンかショートパンツにTシャツなので、仕事をしているようには見えないし、実際に仕事をしていない。子どもと遊んでいる。それなのに、「忙しいでしょう」と言うのは、私の日中の姿を見ず、たくさんの仕事を抱えて、悪戦苦闘、東奔西走している私を想像しているからであろう。

どうでもよい会議などで、「お忙しい中、お集まり頂き誠に恐縮しております。」など、心にもない挨拶を聞くと、「忙しかったら、こんな会議に出て来る筈ないじゃないか」と思う。自分が挨拶しなければならぬ時に「お忙しい中…」などと、自分が嫌いな言葉をブツブツ言っている自分に、なんとも居心地の悪い思いをすることがある。

「忙しいのは、良いことだ」と言う人がいる。忙しいのが良いのではなく、生活が充実していることが良いことなのだ。忙しいとは心をなくすと書くが、何が何だか分からなくなるような忙しさは、良いことではない。どんなに仕事が多かろうと、大きな仕事を抱えていようと、余裕がなければならない。

自然に逆らい、人がコントロールできなくなった原発の問題にしたって、急ぎ過ぎた結果である。もっと便利に、もっと豊かに、もっと早くと、先を急ぎ過ぎた。危険を考える余裕がなかった。子ども達にも、もっと多く、もっと早くと、先を急がせてきた。

子ども達と生活していると、のんびり空を眺めることが多くなる。空気を体の隅々に沁み渡らせるほど、深く息をすることが多くなる。自然の中でゆったりとした幼児期の「時間」が流れていく生活が、子ども達には必要だ。生きることの目的が、のびやかで豊かな人生を送るためであるなら、何も急ぐ必要はないし、忙しく「時」を失うのは勿体ない。

最後に一句「山茶花や忙しきことははずかしと」 森 澄雄



# 天災は忘れた頃にやって来る

(2011.9.01)



天災が起こると、その直後は防護策に熱心に取り組むが、長い年月を経るにつれ、だんだんその時の痛みを忘れてしまう。私は東京の下町で生まれ育ったので、関東大震災の事をよく聞かされた。近くに震災記念堂がある。幼い時から、記念堂の中にある震災とその後の地獄図の様な様相を描いた絵を見て、地震の恐ろしさを心の中にずっと抱いていた。そして、震災は30~50年の周期でずっと続いていることも教えられた。その反面、天性の楽道家ゆえ、「世の中、心配したってしょうがない。なるようにしかならない。」と思に至るのであるが、東京へはなるべく行きたくなかった。

「天災地変こもごも至る」と言うが、人知の及ばぬ自然現象に関しては、どうしようもないことを、極度に心配しても致し方ないが、備えだけはしっかりと整えておく必要がある。自然現象とは違う自然そのものは、私達は大切にしようと思えば、守れるものである。もっと便利に、もっと豊かにと、人間の欲望を満たすために、私達は自然を破壊してきた。レイチェル・カールソンは「センス・オブ・ワンダー」で、人間がもたらす農薬や公害により、自然が汚染され続けていることに、警鐘を鳴らした。安全だと言われ続けた原発も、海を汚し、空気を汚し、大地を汚した。

以前、環境教育について質問された際に、地球を直径一畝の風船にすると、空気はどれくらいか、飲める水の量はどれくらいだと思いますか？と、反問してみたことがある。子ども達にも、私達大人にも、自然の大切さを、そして、自然は思ったより小さく、脆弱なものか考えて欲しかった。

原発で汚染された海、空気、大地は、もとに戻るには何万年もかかるという。周期的に必ずやって来る地震大国で、安全な原発など考えられるのであろうか。起ってしまった事を、過剰に心配することは、かえって風評被害を拡大することになることもあるが、除去し、これから防げる手立てはしっかりと行い、美しい安全な自然環境を、子ども達に手渡す責任が私達にはある。

(文中の答えは、一ミリとスプーン一杯です。空気はヒマラヤ山頂が八千メートルで酸素がほとんどなくなるとすると、空気の層は、取手から守谷の間程度です。)



## 子どもが帰った後

(2011.10.01)



幼稚園の保育時間は、四時間を標準とするとされてきた。しかし、最近はそんなことを言っている幼稚園はどこにもない。早朝保育から、預かり保育の終了まで入れると、十時間から十一時間にまでなる。これが保育園となると、早朝六時から、延長保育で夜八時までとなる。なんと十四時間にもなる子がいる。しかも、土曜、休日保育まで入れると、とんでもないことになる。労働基準法で、大人は守られているが、子どもはどうなるか。

子どもも保育者も余裕がない。「保育サービス」という言葉がある。子どものために充実した良い保育を行うというより、父母のためのサービス、利便性だけを考えているように思えてならない。昔、預かり保育を実施するに当たり、子どもを預け、預かり合う地域の助け合い、支え合う絆を切ってしまうのではないかと心配した。「子育て支援」を言うなら、子育てが楽しくなるような環境を作ることが大切である。それを社会がサポートするシステムと制度を確立し、隣近所、友人、知人みんなで、人と人が繋がり、支え合う中で、たくさんの手で子ども達が育つ。幼児施設は、その中の一つにすぎない。

幼児人口の減少と、今後の幼児施設の不安定な動向のため、保育サービスの充実ばかり重視され、保育（教育）内容どころの話ではなくなっている。しかし、幼児教育の充実なくして、子ども達の未来はない。教育の世界に余裕がなくなっている。

最初の話に戻すと、幼稚園は教育機関であり、初めて出会う小さな社会（幼稚園）の中で、子ども達の緊張時間は四時間程度が適当であるとのことであった。教師も子どもが帰った後は、評価・反省、教材研究の時間が必要である。しかし、現実にはバス通園終了、清掃が終わるとすぐに終業時間になってしまう。幼稚園の先生方は、子どもが帰った後が大切なのである。

日本の幼稚園創始者と言われる倉橋惣三先生の「育ての心」の中に「子どもが帰った後」という文章がある。子どもと一緒にいる間は、自分のしていることを反省したり、考えたりする暇はない。子どもの中に入り込みきって、心に一寸の隙間も残らない。ただ一心不乱。子どもが帰った後で、いろいろのことが思い返される。自分の言動と子どもの思いが見えてくる。この時間が大切であり、そこから創意工夫のより良い保育が生まれてくる。何も考えず、毎日同じことを繰り返す保育は、楽であっても味気ない。教育は余裕がなければ深まらない。創造的教育や、本当の楽しさも生まれない。子育ての喜び、楽しさも、子どものことを深く考える余裕がなければ生まれない。



## 風評被害

(2011.11.01)



運動会も終わり、青空がスカーンと広がり、爽やかな風が流れていました。年少さんがお散歩に出かけました。園庭の端にある大きな金木犀のところで、みんな、鼻を上に向けて香りを嗅ぎました。前日、子ども達と鬼ごっこをしていると、ふいに良い香りがしたので、振り向くと金木犀でした。かいでいると、子ども達も集まってきて「いい匂い」と香りを嗅いでいました。中には「トイレの臭い（消臭剤?）」と言う子もいました。A先生が、私達の様子に気付いて「いい香りですね」と近づいて来ました。私は「毎年、秋にこの香りを伝えてあげたいね。子ども達の心の中に、良い香りが思い出になって広がり、大人になっても、秋になるとよみがえってくるようになるといいね。こういうことが、心を育てるのではないかと思う」と言いました。

そして、お帰りの時間にA先生のクラスを覗くと、先生が話をしていました。「夏が過ぎて、もう秋になってしまいました。秋ってなんでしょう」子ども達は「遠足に行くこと」「少しずつ寒くなっていくの」と、いろいろな答えを出しました。「秋はみんなの周りにいっぱいあります。秋になると、畑や野原や木々が変わっていくのよ。秋になると咲く花もあるし、秋は実りの季節と言って、実を付ける木も植物もあります」と言うと、「お米もできるよ」「幼稚園に来る途中でクリが落ちていたよ」と急に賑やかになり、「それでは明日、天気が良かったら、秋を探しに行こう」ということになりました。

幼児教育は「環境による教育」である、と言われるように、良い環境の中で、環境との相互作用を通し、成長・発達していきます。特に自然環境が重要です。命を感じることで、情緒を育て、心を育てるには、自然に親しむことが大事です。

原発による放射線の影響で、外遊びが制限され、明らかに子ども達の運動能力・体力に影響が出ています。体力だけでなく、心身の発達の全てに影響を受けていると思います。

原発も収束に向かっているというが、不安は尽きません。原発の安全神話も崩壊しました。子供達に代わって、東電に賠償請求したいくらいです。放射線の影響を心配して、線量を減らす行動を取るのは当然のことです。正しい情報のもと、最も子ども達に良いと思う行動をとることが大切です。ともすると、保護者の危惧心をあおるような意見を述べる人が正義で、チェリノブイリや広島・長崎等で、長い間、放射線について研究してきた人が正しいデータと研究を基に「心配ない。健康に影響しない範囲である」と言うと、リスクを軽視していると総攻撃され、解任の署名運動まで起こされているといいます。風評がかえって人々をパニックに陥れ、ストレスをため込んでしまいます。

幼稚園も除染を行いました。今後も除染を徹底して続けます。線量の高い所は避け、子ども達をひばくから守っていきます。そして、子どもの行動もできる限り制限せず、自由に伸び伸びと活動させてあげたいと思います。



## 時の流れ

(2011.12.01)



今年も「あっ！」という間に、一年が過ぎてしまう。何だか年齢とともに、時の流れが速くなっているように感じる。格差社会と言われるけど、時間ほど人々に平等に与えられているものはない。誰もが一日は24時間である。しかし、時間は誰でも同じように流れている訳ではない。忙しくあくせく速い流れの渦にまかれている人もいれば、ゆったりとした流れに揺られている人もいる。また、体感時間には個人差がある。

子どもの時の一年は長い。大人になると早くなるのは何故だろう。最近は若い人でも、時間が短くなっているように感じるらしい。生活の中に問題があるのではないか。予定表にびっしり書き込んで、無為に過ごすことに耐えられない人が増えている。速さ、効率が追求される世の中。誰もが余裕を失っている。近頃は、子どもも忙しいらしい。大人から見ると、無駄に見える「遊び」の時間がなくなっている。遊びの中でしか、人と関わる力や、創造力、思考力、優しさ、といった人間としての基礎が学べないのに、その時間を奪っている。

子どもはもともとスローテンポなのである。お出掛けする時でも、ゆっくりと服のボタンをはめ、穴とボタンがずれて、またやり直しをしたり、とても時間がかかる。さて、お出掛けしたとしても、途中で何かを見つけ、かがみ込んで小さな虫をじっと観察し続けたり、水たまりに写ったお空と自分の顔を交互に見つめ、水に写った青空とお空を見上げたりもする。

子どもには、子どもの時間がある。子どもの時間を大人は奪ってはいけない。この大切な子どもの時間を、二つの意味で私達大人は、特に親が、奪ってしまうことが多くなっている。一つは、不確実な未来のために、“今”を奪ってしまうことである。幼少期には、幼少期にしか体験できない“今”を奪うことが、心身の発達、特に心の成長に、どんな影響を及ぼすか、とても心配である。もう一つは、じっくり体験することが、幼少期の発達に大切なのに、それを待てずに、早く、早くとせかせてしまい、その体験を奪ってしまう。

大人になると、忙しいことが充実していると勘違いするようになる。私も以前はもっとゆったり生活していたような気がする。時の流れは、味わい方次第である。人生も、味わい方次第である。子ども達の人生も、私の人生も、ゆったりと幸福なものにしたいものだ。

